

手びねり木彫

「手びねり木彫」とは僕が勝手に作った造語で、子供が粘土遊びをするように木彫をすること。

木材を刃物で彫り刻んで加工する木彫は、ある程度の計画性や段取りがないと形にできない。自由自在に扱えそうに見える塑像彫刻も心棒をしっかり組まないと粘土が自重で垂れて形にできないが、それでも粘土は両手に収まる小さいサイズなら心棒なしで自由自在に粘土を動かして形が作れる。彫刻家の僕らはその行為を「手びねり」と言って、作家の即興性やエキスが表出するものとして大切に思っている。

ノミと木槌でコツコツ彫るいわゆる木彫では、なかなか粘土の手びねりのような即興性や感覚性を引き出せない。でも僕が日頃彫刻で使っている手斧なら手びねりのアプローチができる。

僕は子供の頃とはにかく粘土少年で、手びねりで動物やら恐竜を作りまくっていた。彫刻とはそういうものだと思っていたが、美術予備校～美大～美術界で経験したいわゆる彫刻はそうではなく、計画と段取りの上であり、それが僕には窮屈だった。

彫刻の道を志して 35 年、自分の手びねり性を封印して身に付けてきた彫刻力だが、還暦も過ぎたのでこらでちょいと手びねり少年を復活させてもいいかなと思いはじめている。

きっと僕は元来、即興性や感覚性と共に彫刻をやりたい人間なんだと思う。

今回の個展はそんな自分への試みの一歩だ。

安藤 榮作